

職場の構内の片隅に、小さなスイセンの花が咲き始めました。冬のあいだ地上ではほとんど変化が見えませんが、早春になるとすっと葉を伸ばし、やがて白い花を静かに開きます。スイセンは、梅やフキノトウなどと並んで、春の訪れを告げる代表的な花の一つです。まだ風は冷たいのに、この花を見ると「季節は確実に動いているのだな」と感じます。

スイセンを見ると、私は映画『第十七捕虜収容所』の一場面を思い出します。収容所長が「春になったら水仙でも植えよう」と語る場面です。穏やかな未来を想像させる印象的な台詞ですが、植物の知識から言えば少し不思議な言葉でもあります。というのも、スイセンは春に植える花ではなく、秋に球根を植えて冬を越し、春に花を咲かせる植物だからです。さらに言えば、映画の舞台である捕虜収容所の痩せた土地では、球根植物がうまく根付くのは簡単ではないでしょう。栄養の乏しい土では、球根はなかなか力強く育ちません。

その点、私の職場の構内の土はよほど条件が良いのでしょうか。今年もまた、白いスイセンが美しく花を開きました。まだ草もまばらな早春の地面に、この清らかな花がいくつも並ぶ様子を見ると、春という季節の確かな到来を感じて、少しうれしい気持ちになります。

